

本当に必要なのかと言わせない古典

 仲島ひとみ（国際基督教大学高等学校）

1 「こてほん」の衝撃

二〇一九年に明星大学で行われたシンポジウム「古典は本当に必要なのか」（略して「こてほん」）が古典教育の関係者に与えた衝撃は大きなものでした。

このシンポジウムでは、まず古典「否定派」が「高校で古典必修は不要である」という主張を展開します。その理由は「経済成長に対して優先度が低い」「差別的な価値観が有害である」「現代語訳で読めばいい」といったものです。これに対して古典「肯定派」は、否定派が作ったデイベートの土台には乗っての反論はしないと宣言し、古典を学ぶ意義として「古典は幸せに生きる知恵を授ける」「高校では実用性より広い教養が大切である」「自国の文化を知る権利がある」「誰が必要になるかわからない」などと主張しました。

この結果、肯定派が否定派に「反論できていない」という評価を、当の否定派はもちろん、議論を見ていたオーディエンスからも受けることになってしまいました。

このシンポジウムを視聴していた勤務校の生徒たちは、その内容が大いに不満だったようです。彼らが感じた問題点は、以下のようなものです。

・否定派と肯定派の議論(論点)がかみあっていない。
・目指しているものもそれぞれがバラバラで、否定派はディベートのつもりのようなのだが、肯定派はパネルディスカッションのようなスタンスである。

・高校の古典という話題でありながら、当事者である高校生の意見が全く聞かれていない。
これらの問題点を乗り越えるべく、生徒たちは自らシンポジウムを企画することになりました。
こうして、シンポジウム「高校に古典は本当に必要なのか」(高校こてほん)が二〇二〇年六月に開催されました。
もともとは三月に学校を会場として開催する予定だったのですが、新型コロナウイルス感染症の流行により、オンラインでの開催となりました。このシンポジウムでは以下のことを行いました。

①二〇一九年シンポジウムの論点整理。否定派・肯定派の四名の主張をまとめ、さらに新たなゲストに迎えた二名の主張を紹介した。

②高校生アンケートを実施。高校生が古典や古典の授業をどう捉えているか、複数の高校の生徒に依頼し、約六〇〇人から回答を得て分析した。

③高校生メンバーが肯定派・否定派に分かれてディベート、合意形成に向けてディスカッションをした。
シンポジウムの詳細に興味のある方は、書籍『高校に古典は本当に必要なのか』(文学通信、二〇二二年)にまとめられているので、こちらをお読みください。

二〇一九年の「こてほん」シンポジウムでは必修・選択という論点が提出されましたが、二〇二〇年の「高校こてほん」ではそこから議論を一步手前に戻して、そもそも高校で古典の授業をする意義があるのかという話をしました。そして、否定派・肯定派の対立ががみあう形で見えるように、③のディベートを行うにあたって、コンテンツ・リテラシー・アイデンティティーという三つの観点から整理しました。これをまとめたのが次の表です。

	意義がある（肯定派）	意義がない（否定派）
コンテンツ	古典に学ぶことは有益である	有益だとしても 現代語訳で学ばばよい
	過去を相対化する視点を持つ	差別的な価値観が有害である
リテラシー	古い資料にアクセスできる	古い資料は アクセス不要の人が多い
	現代語の運用能力向上に つながる	現代語や実用的なことを 優先すべき
アイデン ティティー	個人のルーツ・ よりどころとなる	自分とのつながりを感じない
	共同体としてのつながりを作る	ナショナリズム・ 排他性につながる

意義があるという見方も、意義がないもしくは害があるという主張も、どちらも一理あると言えそうです。しかし、必修・選択の議論は他の科目との兼ね合いもあり、最終的には優先順位をどうつけるかという話になりますので、なかなかここだけを見て簡単に結論を出すことはできません。

私人としては、古典を必修科目として学習することは、リテラシーの面から相当程度正当化できるのではないかと考えています。日本語の書き言葉には、明治時代の言文一致前後でかなり大きな断絶があります。この断絶を乗り越えることを考える時、文語文法と漢文訓読の学習は大きな意味を持ちます。どのような分野に進むとしても、一〇〇年前の資料にアクセスする必要性は意外と多くの人にあり得ますが、一〇〇年前の書き言葉のために文語文法と漢文訓読の知識を学ぶのであれば、そう変わらない努力で一〇〇年前の資料へのアクセスも可能になります。（漢文も含めれば紀元前の資料へのアクセスを可能にしてくれます）そう考えると、古典の学習の「コスパ」はそう悪くないものに思えます。

さて、シンポジウムでは高校生のメンバーが二つの陣営に分かれてディベートをした後、その立場を離れて個人の意見を言い合う「感想戦」がありました。そこでは肯定派も含めて、今の授業にも問題がある、授業の改善が必要だ、という意見が述べられ、それが今回のシンポジウムで到達した合意点という形になりました。現場の教員としては重たい宿題を与えられたな、

と思います。

2 なぜ必要性を問われてしまうのか

そもそもなぜ古典は「本当に必要なか」と問われてしまうのでしょうか。もちろん、こうした教育談義の中で必要性を問われるのは古典だけではなく、英文法だったり三角関数や微分積分だったり、さまざまなものが槍玉にあげられます。しかし、その中でも古典（古文・漢文）は頻繁に問われがちであるように思われます。

なぜ古典は必要性を問われてしまうのか。それは、役に立つとも面白いとも思われていないからではないでしょうか。もし生徒が古典の授業が役に立つと実感していたり、あるいは面白いと楽しんでいたりしたら、おそらく必要かどうかという問いはあえて出てこないでしょう。問わせてしまう責任が、役に立つとも面白いとも思わせることのできていない授業者の側にもあるように思います。

この「役に立つ」とも「面白い」とも思えない状態というのは、外発的動機付け・内発的動機付けのいずれもない状態と言い換えることができます。「外発的動機付け」「内発的動機付け」というのは、聞いたことのある方もいらっしやるかもしれませんが、デシとライアンによる「自己決定理論」の用語です。外発的動機付けとは、ある行為の外側にあつてそれを行う理由となるものを言います。典型的には、罰や報酬がそうです。古典が何かの「役に立つ」というのも、外発的動機付けと言っているかと思えます。これに対して「内発的動機付け」とは、その行為自体がモチベーションとなつているものです。それ自体が「面白い」から、やりたいからやる、というのが内発的動機付けです。一般的に内発的動機付けの方が強力であることや、はじめは内発的動機付けではじめてことでもご褒美をもらおうと外発的動機付けに変わってしまうことなどがよく知られています。

3 古典と外発的動機付け

一口に外発的動機付けと言っても、その実かなりの幅があります。罰を受けたくない（損をしたくない）からやる、報酬がある（得をする）からやる、それが大切なことだと思うからやる。いずれも外発的動機付けではありますが、感じ方としてはずいぶん違いがあるでしょう。

古典がどのように役に立つかということにも、グラデーションがあります。いくつか考えてみましょう。

最も外的なのは「入試で使うから」という理由でしょうか。入試科目に古典が入ることには入学後の学びにつながる意味もあるかもしれませんが、単に選抜に使いやすいということであれば、別にそれが古典である必要はありません。古典そのものが役立つ理由ではないと考えると、動機付けとしては弱くなるように思います。

一方、前にも触れたりテラシーとしての必要性は、もう少し実質的なものです。例えば法律、行政など、さまざまな分野で少しでも歴史をさかのぼろうとすれば文語文法や漢語漢文の知識は必要になりますし、理系分野でも、天文や地震などの研究では実際に古文書こもんじょが使われます。古典の世界は小説・マンガ・アニメといった創作のインスピレーションの宝庫でもあり、原文が読めれば誰かが訳したものしか読めない人より確実に有利です。また、歴史的認識が問題になる中で、意図的であれ非意図的であれ資料が誤読された時にはその誤りを指摘できるような、デマやプロパガンダに流されないための社会的ワクチンとしての役割も軽視できません。これらは、古典でなければならぬ理由ですので、同じ外発的動機付けの中でも学習者が必然性を感じやすいのではないのでしょうか。

4 古典と内発的動機付け

古典そのものが楽しいからやりたくてやる、というのが内発的動機付けです。その楽しみ方にも実はいろいろなものがあります。最も注目されやすいのは文学的に読む面白さだと思えますが、それ以外にも、例えば言語学的に、言葉がどのように使われているか、どのような変遷をたどって現在につながっているか、といったことを考えるのも面白いですし、歴史学的に、史料として古典作品を読み込み、どのようなことが起きていたのかを推定していく面白さもあるでしょう。あるいは科学的に、前項でも触れたように天文や地震に関すること、あるいは古い医学や薬学に関することをひもといていくのは、役に立つかどうか以前にそれ自体が知的好奇心を刺激する面白さがあると思います。このように、内発的動機付けになりそうな古典の面白さをさまざま切り口で考えることで、それに応じた教材の発掘ができるのではないのでしょうか。

ちなみに、古典肯定派には、内発的動機付けで古典を、それも文学的な側面を中心に研究している人が多いように思われます。一方の否定派は、内発的動機付けではなく外発的動機付けで古典を考えています。このあたりでも話のずれ違いがあるのではないかと思います。

5 本当に必要なのかと言わせない古典

それでは、生徒のモチベーションを高め、本当に必要なのかと言われない・言わせない授業をするにはどうしたらいいのでしょうか。内発的・外発的動機付けを意識することが重要ですが、加えて、前掲のデシとライアの自己決定理論から、ヒントになりそうな事柄がありますのでご紹介します。

デシとライアンは、どのような文化に属する人であっても、三つの心理的ニーズを満たすことが健康や幸福(wellbeing)につながることを指摘しました。その三つの心理的ニーズとは、competence(「有能さ」「できる」という感覚)、

autonomy（自律性、自分で決める、選ぶこと）、そして relatedness（関係性、誰かとつながっている感覚）です。これらのニーズを満たすような授業設計をしていくことで、学習者の満足度を高めていくことができると期待されます。それぞれについての実践例やアイデアをあげてみましょう。

6 competence 読める、読めるぞ！

competence（有能さ）へのニーズについては、「読めるぞ！」という感じをどう持つてもらうかが重要です。

① **活用表を参照して読む** これは二〇一九年の「こてほん」シンポジウムの書籍版『古典は本当に必要なのか』の総括でも提案されていましたが、テストに活用表をつけてみる方法があり得ます。文法体系を体系として暗記し、何も見ないで活用させるのは、「できる」と思えるまでのハードルが少々高すぎます。もう少しスモールステップで文法を活用する体験ができるのいいと思います。「それではテストにならないのではないか」と抵抗感を持つ人も多いのですが、実際にそれでみんなが満点を取れるわけではありません。考えてみれば、現実には教員も研究者も、参考書・注釈書・辞書などを参照しながら読んでいきます。古典を手ぶらで読むテストは、ある意味ではかなり特殊な環境とも言えます。

② **「本物」を見る** 教科書の本文は、翻刻され漢字やひらがなの表記なども調整されたものです。このことがかえって「本物の古いものを読めている」と感じにくくさせているかもしれません。そこで、古文書や碑を実際に見て読んでみるという体験はいかがでしょう。実際に近場にある石碑を見に足を運んだりするのも楽しいですし、本は複製でもいいので手に取って見られるのいいと思いますが、最近はデジタルアーカイブも充実してきたので使わない手は

ありません。国立国会図書館が運営する「ジャパンサーチ」(<https://jsearch.go.jp/>)などで検索すれば簡単に教材が作れます。くずし字学習アプリ「KULLA」、Aーくずし字認識アプリ「みを」なども、初心者の強い味方です。

③読みやすいものを読む 入門期は読みやすくして面白いものを読むのが一番です。たいていの教科書が中世の説話で導入しているのも、そのような意図でしょう。さらに近い時代の近代文語文や近世の作品などからも、探してみると今の教科書の定番以外にも生徒の興味を引きそうなものが見つかるかもしれません。例えば「解体新書」「蘭学事始」なども面白そうです。ヒントになる問いや注をつけたプリントを作成するなどして、それを頼りに自分でガツガツ読んでみるような使い方ができると「読めた」という感覚を得やすいと思います。

7 Autonomy 自分で決める！ 選ぶ！

Autonomy（自律性）へのニーズについては、自分で選択し決定するプロセスを組み込んでいくことが重要です。自分で対象や方法を選べるような課題を出してみるのがいいでしょう。

①全文音読チャレンジ 好きな作品を自分で選んで本文を全文音読してみよう、という課題を一年生の夏休みの宿題で出してみました。テキストは原文であれば文庫本でもジャパナレッズ（オンラインデータベース）で閲覧できる全集でも、何でも可。実際に自分でも音読してみ、時間の目安を示しました。例えば方丈記は三〇分、土佐日記は四五分、竹取物語は一時間、伊勢物語や更級日記は一時間四〇分、古今和歌集は四時間程度で全文を音読できます。これは一年生に対してかなりのむちゃぶりだったと思いますが、おおむね楽しんでやってくれたようです。読んだ作品・所要時間とともに感想を書いて提出してもらいましたが、意外と中身がわかっていそうな感想に驚きました。

もちろん本に載っている注釈や現代語訳を参照しているのだと思いますが、「授業でやった文法事項がわかった」などのコメントもあり、「読める」と感じられて competence へのニーズという面でもよかったと思います。

②**翻訳翻案チャレンジ** 教科書的な一つの正解があると思うと苦しいものです。そこで、いろいろな翻訳を参考にし、自分なりの表現を試みようという課題を出してみたことがあります。伊勢物語で三〜四種類、源氏物語で八〜一〇種類の訳（英訳も含む）を並べて紹介。これだけいろいろな訳し方があるというだけで解放された気分になります。が、自分で表現する方も、現代パロディやマンガ・イラストもアリにするとかなり多様になり面白いです。

ここまで全面的なものでなくても、小さなところで選択や工夫の余地が設けられている授業を設計してみましょう。日本の小中高の授業や学校生活では、自分で決めて選ぶ練習をあまりさせていないように思います。そこが変わると、社会のあり方も変わっていくのではないかと、希望も持っています。

8 Relatedness みんなで！ 推し！

Relatedness（関係性）へのニーズについては、教室の中の共同体作りの方向性と、学習内容に対するつながりを作る方向性を考えてみました。

①**グループワーク** 生徒同士で協力して取り組む課題は、学びのコミュニティを作るのに役立ちます。授業法としてさまざまな手法が各所で紹介されていますので、ここでは詳しい説明は割愛しますが、例として「ジグソー学習」、「リテラチャーサークル」、「QFT（質問づくり）」、「インプロ（即興演劇）」、「群読」などが古典の授業でも活用できそうです。

検索してみてください。

②「推し」を作る 古典の作品や作者、登場人物、歌人など、自分の好きな人や物(最近よく言うところの「推し」)を作ると、学習するのも楽しくなります。英語教育の関係者がSNSで「推し文法」「推し構文」といった話をしているのを見かけたことがあり、推し技法・推し単語・推し助詞・推し助動詞などを自分で決めて語り合ったりすると面白いかもしれないと思いました。ちなみに筆者の推し助詞は「さへ」、推し助動詞は「む」です。

古典をめぐるこれまでの議論や高校生アンケートを見ていて、古典に対する考え方には、過去の教員との出会いに影響されている部分が大いと感じます。深みのある知識と愛のある語りで古典ファンを生み出してきた先生は今までにもたくさんいて、そういう先生と出会えた人は幸福だったと言えるでしょう。一方、不幸な出会い方をしてしまったばかりに古典から遠ざかってしまった人も少なくありません。

古典が社会の中で肯定的に捉えられ継承されていくためには、学校でそれを教える教員の力量が全体として上がり、支持される必要があります。そのためには勉強が必要ですし、勉強できる余裕が必要です。労働環境に関わることであり、一朝一夕に劇的な改善は難しいでしょう。しかし、自分が古典を「推す」だけではなく、「推される」教員になり、生徒を古典の魅力につながる道に誘うこと。それができるようなところに立とうという意識を、まずは持ちたいと思います。